

## 江戸の坂道散策

## 第4回 七曲坂 (新宿区)



## 山野 勝 Yamano Masaru

坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役。『タモリのTOKYO 坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞社）がある。

**新**宿区下落合二丁目八と四丁目九の間を北に向かって上る古坂を「七曲坂」という。うねうねと屈曲しているのもその名があるが、別名を「七圃坂」とも呼ぶ。高い塀にはオカメツタがからまり、両脇からは古木が枝を伸ばしている。鎌倉時代には松林で覆われていたが、江戸時代には紅葉の名所となった。

文化十一（一八一四）年刊の『遊歴雑記』によると、源頼朝が近在に陣を張ったとき、敵の軍勢を探索するために、急ぎこの坂を開かせたと伝える。また、坂上に続く台地を鼠山というが、これは、頼朝が不寝番を置いて監視させたことから不寝見山と呼ばれ、これが転じて鼠山と書かれるようになったという。

坂下には氷川神社がある。旧下落合村の鎮守で、女性の宮とも呼ばれる。豊島区高田一丁目にある氷川神社の男体の宮と合わせて夫婦の宮とも称されている。氷川神社の前で、江戸時代の古道である馬場下道（高田馬場へ続く）と雑司ヶ谷道（下落合と雑司ヶ谷を結ぶ）に分かれていた。今も細い道が残っている。



古趣の漂うオバケ坂

### コラム坂 一服茶屋

大田区にある池上本門寺の正面の石段坂は、加藤清正の奇進によるが、名前を「此経難持坂」という。どんな意味なのだろうか。

これは法華経の見宝塔品の偈文（詩句）の一節だ。偈文は九十六文字からなり、文頭の「此経難持」とは「此の経は持ち難し」とよみ、釈尊の入滅後、この経が広くゆき渡るには多くの困難が伴うことを示している。これにちなんで、石段も九十六段に造築されている。

新目白通りの北側に沿う雑司ヶ谷道を西側に進むと、「下落合野鳥の森公園」がある。日中でもうす暗いほど樹木が生い茂り、ウグイスやメジロなどの楽園になっている。この公園の東側を湾曲して上る坂を通称「オバケ坂」という。河岸段丘の片側の崖のことを「はけ」や「ばっけ」と呼ぶが、その「ばっけの坂」が「オバケ坂」に転じたらしい。今でも公園内に狸が棲息しているというから、「オバケ坂」の名も真実味を帯びてくる。古趣の漂う名坂といえる。